

第3次北秋田市総合計画策定に係る 市民ワークショップ「語ろう、つなげる未来の北秋田市」 実施報告書

株式会社NTTデータ経営研究所
金融政策コンサルティングユニット 地域公共政策チーム

目次

1. 開催概要
2. 統計データからみる北秋田市の地域特性
3. まちの将来像および今後の課題

【参考】参加者アンケート集計結果

1. 開催概要

第3次北秋田市総合計画の策定にあたり、北秋田市の市民の皆様とこれからのまちづくりについて一緒に考える市民ワークショップ「語ろう、つながる未来の北秋田市」を開催しました。開催概要は以下のとおりです

開催目的	➤ 第3次北秋田市総合計画策定過程において、市民の参画を得て、日々の暮らしの実態や地域についての思いなども参加者同士で語りながら未来の北秋田市について考えるワークショップ ➤ 市民の視点から、過去、現在とこれからのまちづくりに関する意見を広く収集し、総合計画の検討に活用するために開催
開催日時 会場	➤ 日時：令和7年2月1日(土) 13:30～15:30 ➤ 会場：北秋田市民ふれあいプラザ コムコム 研究室 A・B
参加者 構成	➤ 鷹巣、合川、森吉、阿仁各地区の代表者（自治会長等）：12名程度 ➤ 公募（市内にお住まいの18歳以上の方）：若干名 ※5名程度×3班のワークショップ形式での開催

2. 統計データからみる北秋田市の地域特性（1/3）

WS参加者に地域経済に関する統計や地域幸福度指標（地域における幸福度や生活満足度、暮らしやすさを測るための指標）を確認いただき、これら統計データからみた北秋田市の地域特性に関して意見をいただきました

分野	意見
農林業	■ 農業を大規模化・機械化する必要があるが、高齢農家の資金調達はハードルが高い実態がある ・ 農業の働き盛りの40～50代は農業の大規模化・効率化に向けて「スマート農業」を実践しているが、そうした農家にしか農協もカネを貸さない。60代以上の農家には農協もカネを貸さないため、機械化も難しい ・ 農業の廃業を考えている60～70代は多いが、機械等の廃棄にもカネがかかるため、悩みは多い ■ 田んぼ・山の維持・承継においては、行政の支援が求められる ・ 地域にカネを出せばなんとかなるものでもない。田んぼにしても水路の維持、水の取り回しに大変な苦勞が伴う。行政としてそういった点にも注目が必要だろう。水路保全がなければ農業はできない ・ 農家等からは山や田んぼを誰かに譲りたいという声を聞く。山も財産。山があるからきれいな空気がある。秋田県は水も電力も食糧も自給できる県である。だから何かあっても生き残れる。だが、森を共同林にしても、この先どう維持していけばよいのかわからない。山は保有しているだけでカネがかかり、枝落としにもカネが相当かかる。こうした個人が保有する山をこれからの世代がどう受け継いでいくのか、を考えて市や国が支援しないと厳しい
工業	■ 工場跡地の空き地が多いものの、電力等の不足がハードルとなり、企業誘致や新規進出は活発ではない ・ 工業団地職員の給料は、企業次第であり、企業によって高いところもあれば、低いところもある。リーマンショックで撤退が進み、工場跡地の空き地が多くなった。新しい企業が進出してこないことが問題 ・ 工業団地内で使用する電力や水が不足しており、企業誘致や新規進出のハードルになっている
商業	■ 商店の後継者不足により生活インフラの維持が危惧される ・ 商店街の商店も後継者がおらず、事業承継の課題がある。我々が町での商売をやめたら生活インフラに関わるものを保ってくれる人がいなくなり、物理的に住めなくなってしまう町になる ・ 銀座通り（アーケード街）の空き店舗やさびれ等が目立ち、中心街の活気がなくなっている ■ 鉱山の閉山により人口が減少し、シャッター街となった経緯があり、事業誘致も一本足打法のリスクがある ・ 旧森吉町は、かつて人口が3万5000人だったが、鉱山が閉山したとたんにシャッター街となった。誘致も良いが、事業を起こすにしても一本足打法のリスクがある
雇用	■ 障がい者福祉施設が多く、本市の雇用を創出している ・ 東京都の企業や施設を誘致することを目的に設備検討が進められたため、障がい者福祉施設が多い。その結果、地域内の雇用を創出している。そうした施設での職員の給与水準が県内の他の仕事よりも高い

2. 統計データからみる北秋田市の地域特性（2/3）

（続き）

分野	意見
買い物	■ 自宅近隣に魅力的なお店がないため、市外へ買い物に出かけてしまう - 歩ける範囲に何があるか、に尽きると思う。すると、商店街があるところに行くための道を作って行きやすくするとか、楽に商店街に来てもらうための仕掛けづくりが必要になる。移動販売もかつてはあり、大変助かっていたが、以前より少なくなっている - 買い物は市外のほうが魅力的な店が多いため、車で遠方まで出かけざるを得ない - 車社会のため、ちょっとしたことでも欲しいものを買いに遠くまで行かねばならないのが実態
交通アクセス	■ 自宅から徒歩圏内で行ける各種施設が少なく、車での移動が中心 - 医療施設や商業施設への徒歩圏人口カバー率が低く、徒歩で行ける場所が少ない - 医療施設や商業施設への交通手段が少なく、自家用車での移動が多くなる - 廃止予定のバス路線もあり、今後さらに交通アクセスが悪くなる見込み ■ 冬季は徒歩での移動が制限されるため、交通弱者に対する移動手段の確保が求められる - 将来的には免許返納で車の運転もできなくなるが、雪も多く、徒歩移動は難しい。何等かのしくみが必要だろう - 上小阿仁村では自動運転のバスを運行しているが、カネを払いたくないため乗る人がいない。また、自動運転バスは事前申請で時間が制約される。自分で運転すれば5分なのにそんな面倒なことをやる人がいないのだろう。ただし、ヒトも何もなくなる将来を考えると、ロボットのようなものを導入しないと、この町は将来が厳しいと思っている。次の10年に向けては危機感を持って新しい技術を導入すべきだと考える
観光	■ 周遊観光に適した宿泊施設や交通機関等のインフラが十分に整備されていない - 本市には、宿泊施設が少ないという課題がある。空き家は転用可能なはずだが、まだ活かしきれていない - 特にツアー客などの団体客の宿泊先がない - 仙北市・角館町から阿仁スキー場・森吉山等がある阿仁合駅までは内陸線にて誘客されているが、鷹巣地区までは送客出来ていない。宿泊先が少ないため、滞在できず周遊が難しくしていることも要因の一つではないか - 空港からの2次交通のアクセスが悪く、市内の周遊観光が難しい。観光地をつなぐ交通機関が必要ではないか - 森吉山県立自然公園は電波がつながりにくいほか、インフラの整備が進んでいない。森吉山の入口には観光案内がなく、別地区との周遊ルートがあいまい - 宿泊者参加形態別グラフの夫婦カップルの割合の高さは帰省によるものと推察される。親の様子の見守りや行事等で帰省しているが、ホテル等に宿泊し、実家に宿泊する人が減少しているのではないか

2. 統計データからみる北秋田市の地域特性（3/3）

（続き）

分野	意見
高齢化	■ 市内でも地区によって実情は異なるが、若者が流出してしまうため、更に高齢化が進んでしまう ・ 市内でも地域によって、実情は異なる。阿仁地域では高齢化率が50%を超えている ・ 合川・根子地区等では大家族世帯は少なく、高齢単身世帯割合が多い ・ 若者は高校卒業と同時に、就職・進学で市外に転出してしまうため、更に高齢化が進む
地域コミュニティ	■ 移住者が住みにくい地域コミュニティの環境があるのではないか ・ 地域によっては市外からの移住者に寛容ではなく、住みにくさがあるのではないか ・ とある地区では、市外からの移住者から「この地区は圧迫感がある」と言われたことがある。地域住民との距離的・心理的な近さや閉鎖的な環境から抑圧されている感覚があるとのこと ・ 市外からの移住者に自治会の財産に関わることについては、自治会運営の役割を与えないという実態があった ■ 若年層の減少やつながりの希薄化により、自治会運営の持続性が危惧される ・ 若い人が減少しており、自治会を運営する人も少なくなっている ・ 若者とのつながりが希薄で、地域内のコミュニケーションが減少している ・ 特に、会合などで若い人は意見にくい雰囲気。そうした住みにくさがあり、若い人が流出しているのではないか
学校統廃合	■ 小中学校の統廃合は人口や既存施設の状況、子どもの通学問題等の複数観点の考慮が求められる ・ 阿仁地区と米内沢地区の小学校が統合したが、人口減少下では鷹巣地区・合川地区も含めた再編を議論すべき ・ 目先の児童数の減少だけを見て廃校にするのではなく、将来の各地区の人口推移、老朽化した既存学校施設の状況等の把握のうえ、幅広い議論が必要 ・ 統合すると、子どもたちの移動時間が長くなるほか、歩道もないため、通学面での問題が出てくる ・ 比較的築年数が浅い学校を廃校にするのは、先の施設利活用の問題を残したままになっている。例えば、高齢者福祉施設への転用など様々な用途が考えられる
災害対応	■ 斜面崩壊や水害の危険性が高い地域もあり、防災対応が求められる ・ 皆伐によって土壌の保水力が落ちており、斜面崩壊の危険性が高い。防災の観点で林業を考える必要がある ・ 大岱地区では、特に水害の危険性が高く、橋が崩れると「陸の孤島」となる。災害時の連絡ネットワークを構築する必要があるのではないか、起こった時にどうするかを話し合っておく必要がある。米代川は水量も多くいため、市内全域で水害の危険性はある ・ 防災放送は不要。双方向通信や情報の相互発信の仕組みが必要だろう

3. まちの将来像および今後の課題（1/3）

地域の特性や実情を踏まえた、まちの将来像について、各班（3班）から意見をいただきました。本市出身の若者の本地域への定着・回帰や、コンパクトなまちづくりが求められていることが確認できました

	意見
まちの 将来像	■ 地域への愛着を育み、将来いつでも子どもが帰ってこれるまち ・ 若者が一度は都市部に出ても、故郷への愛着や地域を守りたいという意識を醸成するため、いつでも帰ってこれるような環境や雰囲気づくりが必要 ・ 子ども、若者に強要することなく、自らがUターンを選択してほしい ・ 若者や他の地域から来た人のチャレンジを、地域一体となって伴走支援をしてほしい ■ 若者に優しく、若者が戻ってきたくなるようなまち ・ 本市で取り組んでいる「カムバック縄文サーモン事業※」で放流したサケが大きくなって本市に戻ってきているように、進学や就職等で市外に転出した若者が戻ってきたくなるような取組が必要 ・ 地域から情報発信する際には、「ある」ものに着目して、地域の良さを発信することが重要ではないか ・ 自治会役員の多くは高齢者であるため、次世代のリーダーを育てる必要がある ■ 商業施設や行政施設を集約しつつ、コンパクトなまちづくり ・ 今後も買い物などの移動手段として車は欠かせないため、商業・行政施設を集約してほしい ・ 合川地区では見送られている橋の建設計画がある。コンパクトシティを目指す上でも、公共インフラの再構築は必要

※カムバック縄文サーモン事業とは、世界遺産登録推進の一環として毎年4月に伊勢堂岱遺跡の下を流れる湯車川で行われ、サケの稚魚を放流する事業。放流後、数年かけて毎年10月～12月頃にかけて遡上してくる。

3. まちの将来像および今後の課題（2/3）

前頁で描いたまちの将来像の実現に向けた「今後の課題」に関して、意見をいただきました

今後の課題	意見
地域活動	■ 地域住民のつながりを確保する必要がある ・ 近隣市民のつながりが希薄であるため、まちづくりの交流会（飲み会）をしてはどうか ・ 幅広い世代間の交流が必要ではないか、月に1回集まる仕組みを考えてはどうか ・ トランジションタウン[※]（まちの人が困りごとを持ち寄って、お互いに助け合う活動）の取組みをしてはどうか ・ 若者や高齢者が集まる動機付けとして美味しい食事や運動・レクリエーションをまちの交流会と併せて実施してはどうか ・ 若者世代・若年夫婦の困りごとを聞いてもらえる機会が少ないため、若者の意見を聞く機会・場が必要ではないか。その交流の場の一つとして、根子番楽の練習の場を活用してはどうか。また、根子番楽をはじめとした、地域の良さを若者に伝える機会・場が必要ではないか ■ 人口減少に合わせた自治会運営に見直していく必要がある ・ 自治会の役員をする場合は相応の負担があるため、自治体や企業は「公益貢献休暇制度」を導入してはどうか ・ 自治会の仕組み自体が人口増加時代のモデルであるため、人口減少に合わせた仕組みを考える必要があるのではないか ■ 地域内の互助活動等の継承や地域内での高齢者支援の仕組み化を図る必要がある ・ 地域のために環境保全活動（月に1回阿仁川周辺一帯の草刈り）を実践中だが、今後は若い人へ継承したい ・ 単身高齢者の方への料理提供など、地域の見守りの状況を周知し、地域全体で持続する必要 ・ 高齢化が進んで、若手が増えなければ自治会も維持が難しくなる。皆で見守れるまちを次の10年に向けて高齢者対策や、一人暮らしの生活支援などがシステムとして用意されることが必要ではないか ・ 安心して暮らせる街、高齢者が安全に暮らせる街になるよう推進していただきたい。デジタルにつないでオンラインで何ができるか、といった取組みも啓発してもらい、少ない人間でも多くの人間を守れる、見守れるような仕組みが必要ではないか
交通アクセス	■ 交通弱者のために移動手段の確保に向けた取組が必要 ・ 移動の不便さを解決するためにもそれから、車を安全に乗るためにも、高齢者が安全システムなどを組み込んだ自動車を安価に購入できる仕組みや、自動運転技術などの検証などがあるべき。さらには、それらを踏まえ、将来的にはロボットやAIと共存する町、といった一歩進んだ取組みが必要ではないか

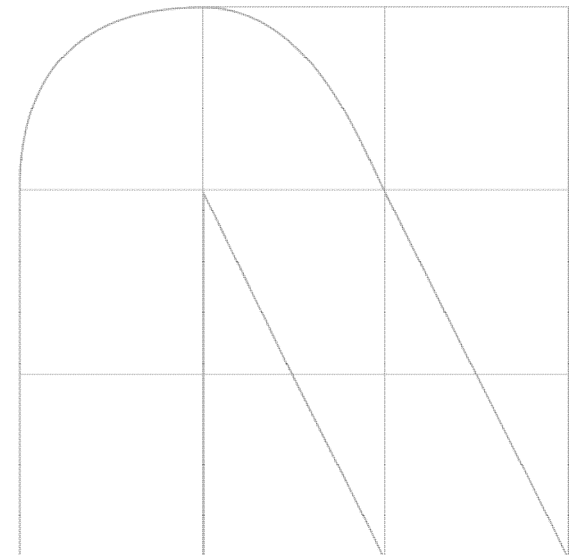
※トランジションタウンとは、「エネルギーや食料」「心や身体の健康」「気候変動や環境の変化」「格差社会や社会に参加できない人の増加」など、地球環境や社会に関する様々な課題に対して、地域住民自らが課題解決に向けて考え、協力し、行動する市民運動のこと。

3. まちの将来像および今後の課題（3/3）

（続き）

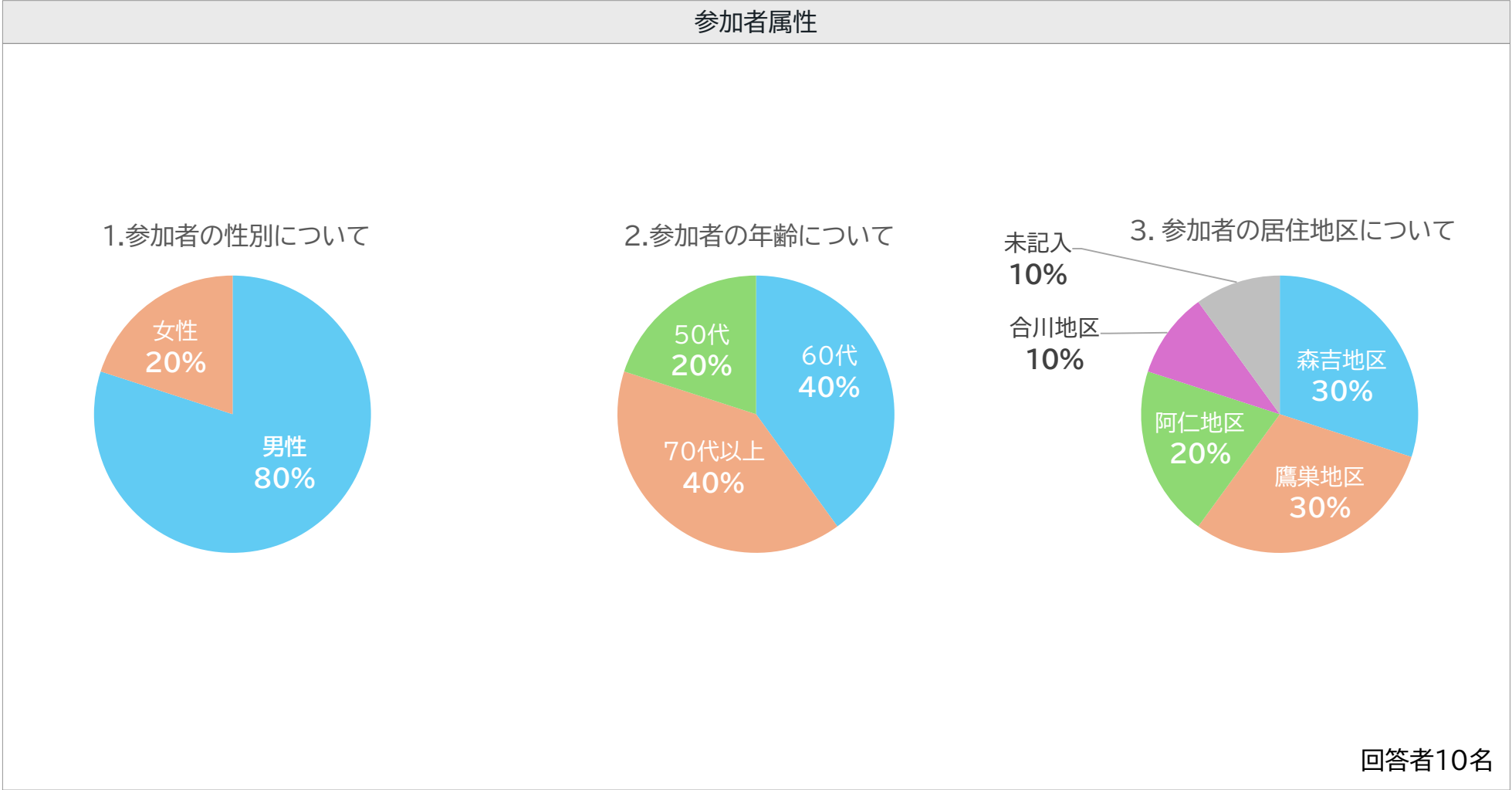
今後の課題	意見
人口流出抑制	■ 人口流出を抑制するためにも多様な働き方の確保や地元定着に向けた取組、子育て世帯支援が必要 ・ 市内に魅力的な仕事がないため、若者は転出してしまう。多様な働き方を確保するためにもテレワーク環境の整備を促進してはどうか。そうした環境を整備することで二拠点生活の選択肢が生まれ、若者の回帰・移住促進につながるのではないか ・ 阿仁地区には東京で仕事をしながら猟師として生活する人もいる。そうした方をモデルに二拠点生活のPRをしてはどうか ・ 転出を抑制するためには、中学生のうちから地元定着に向けた取組をする必要があることから、市内の中学校全体で地元定着に向けた取組をする必要があるのではないか ・ 子育て世帯が安心して生活していくためには希望の見えるような「北秋田の将来像」を示していくことが重要 ・ 次世代となる子どもが生まれないことには、人口は減少し続けてしまう。出産しやすい環境整備をしてはどうか ■ 若者含め住民の意見を聞く機会の創出や市の支援、地域と連携した取組が必要 ・ まちへの要望や改善点、あるいは自身の挑戦したいことなど若者含め住民の意見を聞く機会の創出が必要 ・ 住民の挑戦に伴走してくれるような雰囲気醸成。市や地域が一体となって取り組む必要がある
観光	■ 観光関連施設の整備や認知度向上のための情報発信が必要 ・ 湯の岱温泉、森吉山周辺地区に宿泊施設、電波塔の整備、森吉山の観光強化が必要 ・ 人が集まるような河川の景観（桜の木など）に整備してほしい ・ 認知度が低く、まちの文化財や観光資源などを活かしていないため、外部への発信を強化するべき

【参考】参加者アンケート集計結果



ワークショップ参加者アンケート集計結果 - 参加者属性

第3次北秋田市総合計画策定に係る市民ワークショップでは、各地区からご参加いただき、10名の方からワークショップや総合計画策定に関するご意見をいただきました

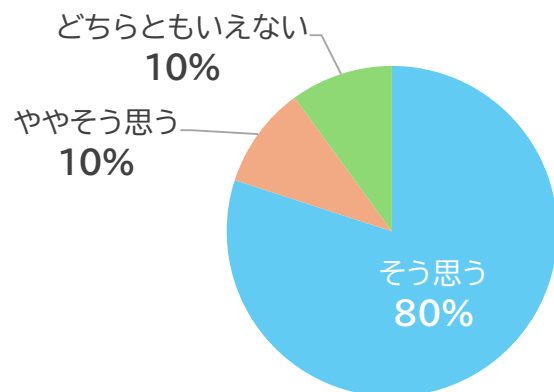


ワークショップ参加者アンケート集計結果 - ワークショップへのご意見

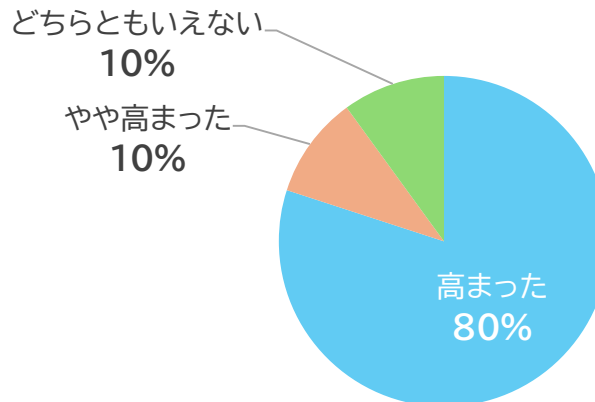
ワークショップでは活発な議論が行われワークショップや北秋田市のまちづくりに対するご意見をいただくことができました

ワークショップへのご意見(全4問)

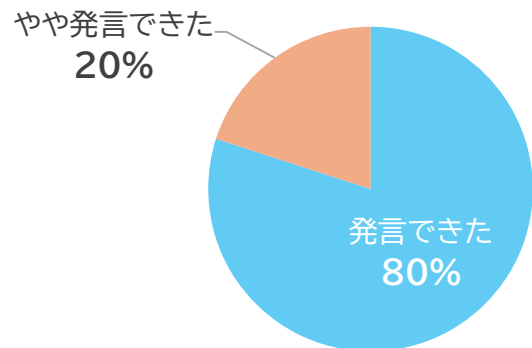
問1 本日のワークショップに参加してよかったと思いますか



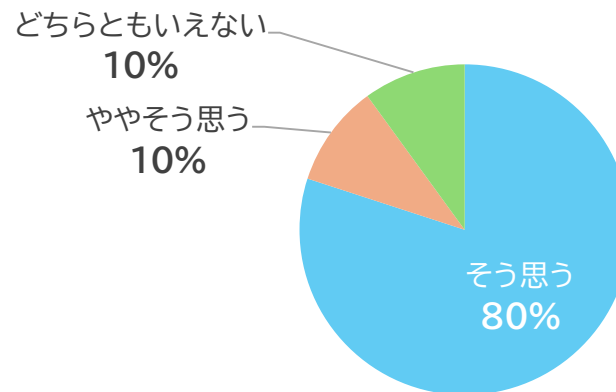
問3 北秋田市のまちづくりに対する関心は高まりましたか



問2 本日のワークショップでは自分の意見を発言できましたか



問4 こうした機会があればまた参加したいと思いますか



回答者10名

ワークショップ参加者アンケート集計結果 - 分野別の主なご意見

以下の通り様々な分野に関してご意見をお寄せいただきました

分野	分野別の主なご意見（自由記述）
農林業	農林業の指導者を増やしてほしい。さらに、新しい産業に結び付けてもらいたい
移住・定住	- テレワークしやすく戻ってきたくなる北秋田市を作ると良い - 都心と比べ混雑がない環境を売りにして2拠点暮らしなども推進し関係人口の増加を目指す方が良いと思う
結婚・子育て	30歳代、40歳代になっても結婚しない人が多い - 少子化が進んでしまうようで大変残念に思う
観光	縄文遺跡からヒントを経て「1万年続くまちをつくろう!」というムーブメントはどうか。世界遺産の活用をもっとしてほしい
高齢化	市独自の高齢者区分を設けてほしい
地域コミュニティ	- 北秋田市のまちづくりより、自治会の維持ができるのかが心配 - 自治団体サポートセンターの開設で地域が元気で継続できる体制整備を望みたい（役所窓口、財政支援）

回答者10名

4. ワークショップ参加者アンケート集計結果 - ワークショップ等へのご意見・ご感想

今後のワークショップや総合計画の検討に活用させていただきます

ワークショップ等へのご意見・ご感想（自由記述）

- 市民+議員+市職員や婦人会・自治会員なども話し合いに入れてほしい。特に女性の視点や30代、40代、50代の視点が必要
- 総合計画策定をコンサルティング事業者と市職員だけで進めるだけでなく、頻繁に進捗状況や内容を公開してほしい
- 様々な団体が集まる際に意見交換をしてはどうか。今回のように事業者の議事進行があれば、意見集約に役立つのではないか
- もっと若い年代の方にも参加してほしい
- 総合計画は新市長の発想を十分取り入れてほしい

回答者10名

NTT Data

株式会社NTTデータ経営研究所

Lighting the way
to a brighter society